

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 12 日現在

機関番号：32689

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2016

課題番号：26590200

研究課題名（和文）高校教育改革における 多元的生成モデル の構築に関する臨床的研究

研究課題名（英文）A clinical study of constructing &lt;pluralistic generation model&gt; in high school education reform

研究代表者

菊地 栄治（KIKUCHI, Eiji）

早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授

研究者番号：10211872

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、2015年に全国の高校校長と教員を対象に質問紙調査を実施した。2004年データとの比較から、以下の知見が得られた。第一に、社会の多様な現実と向き合い、他者とともに社会を創っていくということが軽視される傾向が強まってきた。第二に、校長も教員も自律性をより軽視するようになってきた（とくに中堅教員）。第三に、教員は生徒と深くかかわる余裕をなくしつつある。最後に、これらの傾向には教員の多忙化が一定程度影響を及ぼしている。一連の変化は、一元的操作モデルが浸透した結果であり、今後さらなる悪循環が懸念される。事例研究によれば、多元的生成モデルは重要なオルタナティブとなり得ることがわかる。

研究成果の概要（英文）：In this study, a questionnaire survey was conducted for high school principals and teachers nationwide in 2015. Based on the comparison with the corresponding 2004 data, the following findings were obtained. First, as we have missed the opportunities to encounter diverse people and social realities during these periods, teachers have neglected the competence for constructing societies more and more. Secondly, both principals and teachers have decreased their autonomy, especially among middle-aged teachers. Thirdly, teachers are weakening the involvement with students. Finally, these trends have been influenced to some degree by teachers' busy work conditions. These changes in around a decade are the results of the penetration of <unitary operation model>, and so we are afraid of the vicious circle. According to case studies, <pluralistic generation model> has the potential to provide important alternatives.

研究分野：教育学、教育社会学

キーワード： 多元的生成モデル の多忙化 一元的操作モデル 高校教育改革 相互的主体変容 教師の自律性 教職

### 1. 研究開始当初の背景

申請者は、1990年代以降、研究者として継続的に先導的・内発的な高校づくりに寄り添う機会に恵まれてきた。その中で、高校生をエンパワメントしながら、かつ、持続可能で深い取り組みを展開し続けている当事者と出会うことができた。他方、高校教育のメインストリームは、旧来的な教育にとどまる傾向があることも厳然たる事実であった。両者のギャップを創り出しているものは、いったい何なのか？それはいかにして埋めることができ、より豊かで持続可能な高校教育改革を实践するにはどのような視点が必要になるのか。高校教育改革の現実をつぶさに観察する中で、こうした問いに対して一定の「解」を見いだすことが学術的・実践的にきわめて重要であるとの認識を深めるにいたった。

本研究は、現実と向き合う諸経験と理論的探究の「対話」を通して着想されたものである。

### 2. 研究の目的

高校教育改革の理論と実践に関する臨床的研究は、依然として未開拓の研究領域である。新自由主義や新保守主義がわが国の教育システム全般を席卷する中で、高校教育改革の代替モデルを見出せないままアポリアに陥っている。

本研究は、これまでの教育改革と教育研究の史的展開と実践構造の本質を批判的／反省的に分析・考究し、私たちの教育社会が抱えている根源的な課題と向き合うための突破口を多元的生成モデルに見出しながら、とくに、高校教育に焦点を合わせて理論的・実践的な地平を切り拓く創発的な研究である。高校教育改革に関する多面的な実態分析を通して、多元的生成モデルに新たなブレイクスルーの可能性を見出す。高校教育のみならず、教育全般にかかわる多様な「場」を創造的に再構築し得る第一歩として本研究の学術的・政策的な意義があると考えている。

なお、キーワードである「相互的主体変容」のプロセスを3つの次元に分割し、多元的生成モデルの概念図を描いたものが図1である。

図1 多元的生成モデルの概念図



### 3. 研究の方法

#### (1) 教育改革言説と政策研究の分析

これまでの高校教育改革の語りの特徴と構造について検討を加える。とりわけ、近年の中央での教育言説のうち、大学との接続関係をめぐって語られる「学士力」「質保証」および新学習指導要領の中心的なコンセプト(「カリキュラム・マネジメント」「アクティブ・ラーニング」「公共」等)に焦点を合わせて、それらの特質と文脈を理論的に整理する。あわせて、近年の教育改革を彩る「新自由主義」「新保守主義」「形式主義」「功利主義」の4つの傾向性について整理していくこととする。

#### (2) 全国高校校長・教員調査の実施と分析

2015年に全国高校校長・調査を実施し、11年前に実施した調査から得られたデータと比較分析を試みる。

調査時期：2004年3月および2015年3月

調査方法：郵送自記式質問紙調査

調査票の種類：

(a) 校長調査：全国の公立・私立高校(全日制課程・本校)の中から5分の1の抽出確率で系統無作為抽出し、対象校に調査票等を送付。

(b) 教員調査：(a)の公立高校のうち4分の1を系統無作為抽出し、当該校の一般教員(教頭を含む悉皆：ただし回答を承諾した者のみ)を対象に実施(記入後の調査票は個々の回答者が内封筒に封入の上、学校単位で回収)。

サンプル数と回収率(カッコ内は校長調査+教員調査)：

(a) 2004年調査対象校 1046校(200校)

同 回収校 560校(166校 4441名)

同 回収率 53.5%(83.0%)

(b) 2015年調査対象校 779校(169校)

同 回収校 229校(81校 1512名)

同 回収率 29.4%(47.9%)

サンプル特性の比較：高校の所在する都道府県の分布を例にとると、高校再編等の点で切実な課題に直面する地域からの回答が比較的多くなっている傾向はあるものの、全般的には二時点間の比較は可能であると考えてよい。また、高校教員の性別と高校の「学力」層においては大きな変化は見られず、全体を一定程度正確に反映しているように見える。また、高校教員の年齢構成においても、若年化と高齢化の二極化、および、中堅層の減少という点を現状を投影する程度の変化であるといつてよい。総じて、二回のデータは比較可能なデータセットであると判断することができる。

#### (3) 多元的生成モデルにもとづく実践にかかわる臨床的研究

公立高校のうち、多元的生成モデルに近似した教育実践を試みている事例に焦点を合わせて、学校づくりのプロセスに参画させていただきながら、当該実践が可能になる諸条件を解明するための質的研究を継続的

に実施する。

#### 4. 研究成果

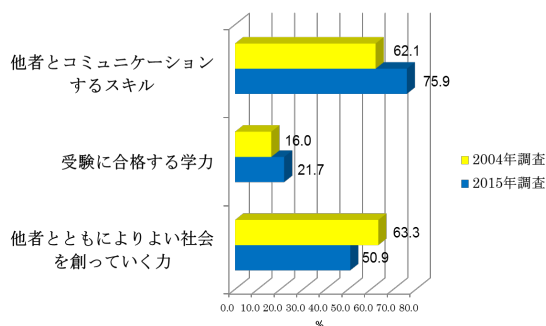
3年間の主な研究成果は、以下の通りである。とくに、11年間の高校教育の変化はきわめて重要な示唆を含んでいた。主な知見は、以下の通りである。

(1) 公立高校の学区拡大など高校教育段階においても「新自由主義の教育改革」が進められる中で、高校階層構造の拡大・深化が進行していった。これらを通して格差が正統化されていく傾向も強まったと推論できる。

(2) それぞれの層での授業力向上をめぐる努力がなされる中で、授業規律を含めた日常の授業場面での不満はかつてよりも表出しづらくなっている。

(3) 一元的な学力形成の偏重が進んでいる一方で、「社会の形成者を育てる」という側面は急速に劣化している（図2参照）。「総合的学習の時間」のテーマ設定等にみられるように、リアルな現実と向き合う機会は次第に乏しくなっている。

図2 重視される「学力」の変化



注)「高校で生徒は何を身につけるべきだと考えますか」という質問への回答（複数回答方式）

(4) これらの変化の背景には学校目標の重点化・物象化があり、組織論的には一元的な単学校経営主義の増殖と背中合わせである可能性が高い。対話の乏しいプロセスの中で、教員の職務がライン化されていることを象徴している。

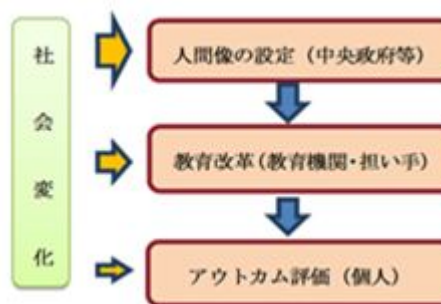
(5) ライン化の一環として、カリキュラム編成にかかわる自律性がきわめて劣化していることも注目される。教員のみならず校長においても、自律的なカリキュラム策定等に対して否定的な意識が強まっている。とりわけ、中堅層の教員意識は専門職としての教職を維持し切れないほどに弱体化されている。

(6) この背景のひとつが、教員の不可逆的ともいえる多忙化の現実である。とくに極端に就業時間が長い教員の割合が増大している。たとえば、平日の一日平均勤務時間が「12時間以上」に上る層の割合は、15.6%（2004年）から23.2%（2015年）へと大幅に増加している。

(6) 多忙化ともかかわって、生徒とのかかわりが浅くなる傾向が強まっている。たとえば、放課後の雑談や課題を抱える生徒への家庭訪問などが削られる傾向が見られた。

以上のように、高校教育にはますます一元的操作モデルが浸透しているという現実がある（一元的操作モデルについては、図3参照）。

図3 一元的操作モデルの概念図



11年前の調査データとの比較を通して、高校教育の現実の構造的な側面に正対することの重要性が浮かび上がった。他方で、多元的生成モデルにもとづく試みは、教職員相互の関係性を豊かにし、かつ、持続可能で深い学びを生徒のみならず教員に対しても提供することができていることが明らかになった。

次なる課題は、多元的生成モデルの多様な試みをことばの正しい意味で「臨床的に」描き出し、当事者にとってと同時に社会にとってどのような可能性をもっているのかを探究することである。その上で、多元的生成モデルが現代社会においていかにして可能になるのかという「実践の文脈」に関する考察へと視点を移していく必要がある。そのためには、このような時代状況の中でも内発的で持続可能な取り組みを丁寧に試みている当事者の相互的主体変容のプロセスを記述することから始めなければならない。

本研究の知見は、グローバル化時代の「能力主義」の中で新学習指導要領の実施を控えた高校教育をどのように再構築していくかという点に関して一定の示唆を提供している。私たちの社会が「もうひとつの可能性」を持ち得ないのかを問い直すことを通して、「希望をつむぐ」方向へと現実を再構築していく必要がある。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

菊地栄治、「質保証」問題と学びの構造転換 - 高校教育研究による再構築 -、教育社会科学研究、査読有、98集、2016、51 - 70  
菊地栄治、教師教育改革の批判的検討と教

育経営学の行方 - 多元的生成モデルの可能性 -、日本教育経営学会紀要、査読有、58号、2016、13 - 23

菊地栄治、高校教育の近未来を捉え直す - 大学と社会が変わっていくために -、日本教育 IDE-現代の高等教育、査読無、58号、2016、13 - 23

菊地栄治、多元的生成モデルにもとづく教育社会づくりへの臨床的研究、科研費 NEWS、査読無、2015-4、2016、6

菊地栄治、貧困の連鎖と向き合う高校教育 - 関係性をつむぐ 多元的生成モデルの可能性 -、現代思想、査読無、43巻、2015、224 - 234

〔学会発表〕(計1件)

菊地栄治、高校教育はどう変わったのか? - 2004・2015年全国校長・教員調査データの比較分析 -、日本教育社会学会第67回学会大会、2015年9月9日(駒澤大学)

〔図書〕(計1件)

菊地栄治、高校教育のポリティクス - 近代と向き合うもうひとつの物語 -、小玉重夫編『学校のポリティクス』岩波書店、2016、189 - 211

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

菊地 栄治 (KIKUCHI, Eiji)

早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授  
研究者番号：10211872